D･H･ロレンス『虹』-生命の核-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富永, 昭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8947

D・H・ロレンス『虹』

——生 命 の 核——

富　永　　昭

アンナ・ブラングウィンの体内に新しい生命が宿った時，彼女と夫ウィルとの間には深い溝が生じていた。夫に事を告げかねた彼女は両親を実家に訪ねて涙ながらに事情を打明ける。そこへ妻を案じたウィルがやって来るのだが，父親トム・ブラングウィンは愛する継娘を奪った甥に故知れぬ苛立ちを覚え，一方アンナは胎内の温もりを感じながら，見知らぬ実父の事を熱心に母リディアに尋ねる。母は遠い昔をしのぶかの様にポーランド人の前夫ポール・レンスキーの事を娘アンナに語り，その異国人レンスキーと同じ生命の流れを妻アンナに感じたウィルは彼女への新しい愛情の湧きたつのを覚える。過去の情熱に想いを馳せる母も，自分の中に流れる血の神秘を胎内の新しい生命への思いに絡ませるアンナも，娘への満たされぬ愛情に煩悶する父も，妻への慾望を新たに燃やすウィルも，ここではすべて，孤立しては存在できない人間の奥底で怯えている生命のかじかんだ火につつまれており，その火の共通の源を探し求めているかの様に見える。ロレンスはこの場面を次の様に結んでいる。（数字はペンギン版内の頁数）

In the room, there came a silence and a singleness over all their hearts. They were separate people with separate destinies. Why should they seek each to lay violent hands of claim on the other? (178)

この「沈黙と孤立性」という言葉の中にそれぞれの人間の想いの深さと強さを見て取る事ができる。そしてその孤立性は黙している故に眼に見えないところで互に鋭敏に呼応し合い，それはしかし，心の慾求の強さ故に単なる孤立よりも更に悲痛な孤独感を呼び起し，その慾求の動かし難さを宿命的に意識し合う呼応なのである。だがその人間達は，自己の慾求の強さに押されて他人の上に手をさし伸ばす時，相手の心の慾求を忘れがちになる。「なぜ人間は互に激しい慾求の手をさしのべ合うのだろうか」という問は，精神的というより肉体的なものを感じさせて，肉体の自我が自己の強い存在を維持しながら，或はむしろそれを維持するために，他の肉体の自我に働きかける緊張感の中に自ら身を投げようとしているのだと思わせるのである。

自分が自分の世界しか占めていない事，自分の既知の世界の中にしか存在していない事，言い換えれば，何らかの形で自分を拡大できない事，そうした閉ざされた状態への不満が他の人間への慾求を生むわけであるが，そこに自分と異質の生命への憧憬が本質的に含まれていて，その異質の生命が自分の生命の本質と同様に固有の動かし難い慾求と宿命を持つ事をはっきり見つめるところから，その間に呼応と緊張感が始まる。ロレンスはしばしば，「他者」(otherness)，「暗闇」(darkness)，「未知の世界」(the unknown world)という言葉を使っているが，他者の厳然たる存在を認めてそれに働きかけるところから暗闇を経て未知の世界へと誘われるのである。暗闇とか未知の世界とかいうものは具体的な「物」でない故に，又神秘として把握されるところに意味がある故に，それを実体として捉える事は困難であるが，その二つのものに人を導く契機となる「他者」というものは人間の肉体のあり方の中に存在する故に，ロレンスは極めて印象深く描写しており，それは『虹』という作品の出発点となっていて，それなくしてこの小説の世界は動き出さないのである。

「他者」とは単に自分以外の異質のものの意ではない。それは生命に溢れるものでなければならず，その生命は満たすべき慾求を内に秘めたものでなければならず，自らの慾求の激しさに震える繊細さをもつものでなければならない。そしてそれは自己の生命の，「傷つきやすい」(vulnerable)，強靭な実在を直

視させる事によって見る者を自己発見と生命讃美へと誘う力を持っていなければならないのである。ポーランド人の寡婦リディア・レンスキーのうつろな視線によって自己の宿命の肉迫を感じたトム・ブラングウィンは教会で娘アンナを連れたリディアを次の様に観察している。

.... In the tiny place, with its mere dozen pews, he sat not far from the stranger. There was a fineness about her, a poignancy about the way she sat and held her head lifted. She was strange, from far off, yet so intimate. She was from far away, a presence, so close to his soul. She was not really there, sitting in Cossethay church beside her little girl. She was not living the apparent life of her days. She belonged to somewhere else. He felt it poignantly, as something real and natural. But a pang of fear for his own concrete life, that was only Cossethay, hurt him, and gave him misgiving. (32～33)

彼女の姿が現実のものの様に思われないのは，トムにとって彼女が外国人であるからだけでなく，夫を失って異国で娘と二人暮しをする女の中に，支えを要求する不安な姿があるからでもあり，その消えゆく様なか細さがトムに他者を意識させて自分の力が彼女のために新たに生じる事を信じさせるのである。「身を刺す様な」(poignant) という繰り返される言葉の中に彼女に惹きつけられたトムの心を締めつける切なさを読み取る事ができる。やがて彼女を胸に抱いた彼は次の様に感じる。

He had her in his arms, and, obliterated, was kissing her. And it was sheer, blenched agony to him, to break away from himself. She was there so small and light and accepting in his arms, like a child, and yet with such an insinuation of embrace, of infinite embrace, that he could not bear it, he could not stand. (46)

かじかんで子供の様になっているリディアはその存在の脆弱さの故にトムの心に怯む事のないとほしい愛情を掻きたてる。そしてその抱擁の微妙な接触から慾求にわななく生命の核に触れて堪え難い切なさを感じたのである。勿論男のトムも同様に自己の生命の本質を彼女の前に裸にしているのであり，それを通して互に他者としての本質を意識し合うのである。

こうした「身を刺す様な」とか「堪え難い」とかの表現によってロレンスが言わんとしているのは，生命の奥深い慾求が何らかの形で異性の眼に映った時に生じる哀れさであり，痛ましさであり，又いとほしさである。そこで男性としての自分の力のあるべき位置をトムは本能的に知り，その力がリディアの肉体の重い実体感を支えている事を意識する様になる。それは他者の肉体を通しての自己把握であり，そこでは，遠く離れてリディアのかじかんだ姿を見た時の心理的な堪え難さだけでなく，彼女という他者の実体を支えている自分の力への不安という，より切迫した堪え難さが加わっているのだが，肉体の接触という親密さの中に，強靱な慾求を持つ他者の存在を意識する事の緊張感に本質的に伴う，生命そのものの対立の堪え難さが二人にのしかかっているのである。

トムが，リディアの存在の中に女の慾求の切なさを痛い程に感じながら，縫い物をする彼女を見つめていると，彼女の方から彼に愛を呼びかけるところで次の様なくだりがある。

> And she put her arms round him as he stood before her, round his thighs, pressing him against her breast. And her hands on him seemed to reveal to him mould of his own nakedness, he was passionately lovely to himself. He could not bear to look at her. (94)

彼の体に触れた彼女の手はその儘彼女のさし迫った慾求を表わしており，その動きに身を委ねる事によって彼は自分の中にある男としての力の湧き出る根

源を意識する。そしてその彼女の慾求の激しさにはやはり，内に宿る否応ない生命に流される痛々しさがあって，トムは自分の新しい力の行く方への不安と共に，そうした彼女にその力を押しつけてゆく事を拒否できない自分の肉体の宿命を堪え難く思うのである。

Anthony Beal は，「このトムの体験はこの小説の根幹をなすものであって，その他の男女の関係も暗にこの体験と対照させる形で描かれているのだ」[(1)]と言っているが，イギリス農家に育ったトムとポーランド人リディアの間に生じたこの生命の接触がその後どの様な形で後の世代に継承されてゆくかが物語のポイントの一つであると言ってよかろう。

リディアはかじかんだわびしい子持ちの寡婦であったが，その孫に当る若いアーシュラの場合には，堪え難く思わせる生命の慾求が処女の初々しさの中に現われている。アーシュラと激しい初恋の接吻を交した時，彼女の姿はアントン・スクレベンスキーの眼に次の様に映ってその心を動かすのである。

> She was very beautiful then. so wide open, so radiant, so palpitating, exquisitely vulnerable and poignantly, wrongly, throwing herself to risk. It roused a sort of madness in him.
>
> .... And under all her laughing, poignant recklessness was the quiver of tears. That almost sent him mad, mad with desire, with pain, whose only issue was through possession of her body.(302～3)

体験に照して自己の姿を顧みる事のできないアーシュラは，リディアがつつましく奥に秘めていた生命の核をアントンの前に露出してしまっている。自分の行為の意味を知っていたリディアと違ってアーシュラはその生命を泥足で踏み躙られる危険に気付いていない。そこには本然的な生命の慾求を曝け出すもののみが持つ美しさと悲しさがあって，アントンの心に男性としての，彼女と向い合った立場を意識させてしまう。その美しさと悲しさがアントンにとってアーシュラを他者にしたのであり，彼を対極に押しやって男としての存在を

はっきり意識させたのである。この少し前アーシュラがアントンと会話を交えながらその姿に惹かれてゆくところは次の様になっいる。

> He seemed simply acquiescent in the fact of his own being, as if he were beyond any change or question. He was himself. There was a sense of fatality about him that fascinated her. He made no effort to prove himself to other people. Let it be accepted for what it was, his own being. In its isolation it made no excuse or explanation for itself. (291)

ここでもやはり，女の場合程の痛々しさはないが，他者としてのアントンが固有の生命に動かされている孤立性にアーシュラは魅力を感じていて，それは精神や観念の介入していない肉体そのものの本質的に放射する力なのである。そして彼女が彼の中に感じる宿命というものは，彼女が捏造したものでは無論なく，当人が意識するかしないかに関係なく互の孤立した宿命を感じ合う事が他者を意識する事の前提なのであり，自己の責任の埒外にあるその宿命の痛ましさが異性同士を結びつけるものの基本なのだと言ってよい。Julian Moynahanは先のトムとリディアについて，「トムとリディアが彼等の新しい生命を選択するのではない。その生命の方が彼等二人を選んだのだ。彼等は不可知なある力によってそれと知らずに動かされる存在なのだ」[(2)]と言っているが，これはその儘アーシュラとアントンにも当てはまる事なのである。こうした無抵抗な宿命の姿を見る事こそ外気に曝された異性の生命の慾求の実体を見つめる事なのだと言えよう。そうした両性の生命が孤立している事は，それぞれ陰陽に帯電した粒子が孤立をしている如く不安定な姿なのである。

ロレンスのいう他者の意識とは，自分の肉体の持つ本能的な慾求に押される負い目を背負い，見る者にそれを支える力の芽生えを自己の内に感じさせるものを通しての自己認識という事にある。注意すべきは，それが肉体という「物」の放射する神秘的な力を契機としている点である。それは肉体の奥深い核(kernel)の持つ本質であって，それを観念や精神のヴェールで互に隠蔽する事

なく，又互にその前で怯む事なく，それを通して触れ合う事が要求される。それは生命の原形質ともいうべきものであるために，異性のそれに触れる事も自分のそれを異性の手に委ねる事も，人間の存在すべてにかかわる堪え難い緊張を生み出すものである。ロレンスの描く人物，特に男性，にはそれに耐え得ぬ性的失格者が多いのだが，ロレンスはその原形質を，得体の知れぬ，ぬるぬるしたものとして描いているのではなく，明晰な輪郭と侵し難い清潔さをもった実体として見ている事が重要である。ロレンスのよく使う「暗闇」とか「未知の世界」とかの表現は人間の肉体をとりまく世界，或はその奥に求めようする世界の観念的表現であって，物としての肉体のもつ本質はむしろ明朗・明晰なものなのであり，それを見つめる事から出発したところにロレンスの本質があると見るべきであろう。アンナとウィルが結婚して外の喧騒を遁れて二人だけの生活を送るところで，次の様な文章がある。

> .... He heard it in the hucksters' cries, the noise of carts, the calling of children. And it was all like the hard, shed rind, discarded. Inside, in the softness and stillness of the room, was the naked kernel, that palpitated in silent activity, absorbed in reality.
>
> Inside the room was a great steadiness, a core of living eternity. Only far outside, at the rim, went on the noise and the destruction. Here at the centre the great wheel was motionless, centred upon itself. Here was a poised, unflawed stillness that was beyond time, because it remained the same, inexhaustible, unchanging, unexhausted. (145)

この文章から読者の眼に映ってくるのは，どろどろしたぬかるみの様な愛慾でもなく，霧の中に神秘化された性の世界でもない。そこにあるのは，互に支え合って一つに結ばれている男女の肉体の「核」の明晰な生きた姿そのもので

あり，その「核」の陰陽の相異以外のすべて，各々の過去も現在も忘れる瞬間の姿であり，精神や観念によって曖昧化され歪曲化される以前の純潔な「物」そのものが合一した静かな有様なのである。 Mark Spilka は，「ロレンスは生命の目標を有機的存在の達成におき，その退化及至否定を唯一の大罪と見做したのだ[3]」と言い，その「有機的存在」とは生物学的な機能と結びついた意味の筈であり，そこに生命の最も純粋な姿を見る事ができるのである。爽雑物をすべて取り去った，肉体そのものの有機的な結びつきの静謐な有様が，それが不動のものであるだけにむしろ一種の透明な明るさに包まれているかの様に描かれていると言えよう。

肉体の核に宿る生命は強靱なものであるが，同時にそれは一寸した外気の冷たさにも痛みを覚え萎縮する傷つきやすさ（vulnerability）をもっていて，その強さを含んだ弱さが宿命を思わせたり，痛ましさを感じさせたりするのだとも言えよう。勿論こうした傷つきやすさは男性の場合にも言い得るものなのだが，ロレンスは三代に亘る女性の中にその本質を花のイメージを使って見事に表している。異国で寡婦生活をしているリディア・レンスキーが時折見かけるトム・ブラングウィンによって自分の内奥に隠されていた生への意慾に次第に眼醒めてゆくところでロレンスは次の様に書いている。

But she had felt Brangwen go by almost as if he had brushed her. She had tingled in body as she had gone on up the road. After she had been with him in the Marsh kitchen, the voice of her body had risen strong and insistent. Soon, she wanted him. He was the man who had come nearest to her for her awakening.

Always, however, between-whiles she lapsed into the old unconsciousness, indifference, and there was a will in her to save herself from living any more. But she would wake in the morning one day and feel her blood running, feel herself lying open like a flower unsheathed in the sun, insistent and potent with demand. (55)

何度か古い元の殻に閉じこもろうとする衝動と闘った後，それを克服したリディアに温い血が流れ始めると，彼女は花の様な姿の自分に全身を預けるのである。

.... The warmth flowed through her, she felt herself opening, unfolding, asking, as a flower opens in full request under the sun, as the beaks of tiny birds open flat, to receive, to receive. And unfolded she turned to him, straight to him. And he came, slowly, afraid, held back by uncouth fear, and driven by a desire bigger than himself.

When she opened and turned to him, then all that had been and all that was, was gone from her, she was as new as a flower that unsheathes itself and stands always ready, waiting, receptive. (56)

リディアの娘アンナが夫ウィルとの葛藤に悩んでいるところで次の様な描写がある。

.... When he was oblivious of her, she almost went mad with fear. For she had become so vulnerable, so exposed. She was in touch so intimately.

.... Always, her husband was to her the unknown to which she was delivered up. She was a flower that has been tempted forth into blossom, and has no retreat. He had her nakedness in his power. And who was he, what was he? A blind thing, a dark force, without knowledge. She wanted to preserve herself. (169) .....

And ever and again, the pure love came in sunbeams between them, when she was like a flower in the sun to him, so beautiful, so shining, so intensely dear that he could scarcely bear it. (170)

そしてアンナの娘アーシュラが初恋のアントンの眼にどう映ったかを次の文章で見てみたい。

> ..... Like a flower shaking and wide-opened in the sun, she tempted him and challenged him, and he accepted the challenge, something went fixed in him. (302～3)

リディアは既に結婚生活の情熱を経験した女であるから，花の様な新鮮さを呼び戻してゆく自分を意識し，その花の中にひそむ強い慾求を自覚して，自らその花の情熱に身を任せようとし，体験の浅いトム・ブラングウィンがそれを理解せずに尋常の手続きを経て求婚するのに苛立ちを覚える。彼女は花の様になって自分がいかに傷つきやすく崩壊しやすい存在になったかを知っていて，トムとの接触がなければその命を長く保てない事，自分の花が空しくその弁を閉じてしまうであろう事を自覚していたのである。その娘アンナは夫との関係が今だに確立していない事が不安であり，結婚によって開花してしまった自分の生命の核が露出された儘宙に浮いている様な恐れを抱いている。そしてリディアの如く夫との接触のもたらす世界を確認し得ない彼女は，そこから身を守ろうという衝動をも感じる。だが彼女は既に咲いてしまった花であり，否応なく夫ウィルの手に掌握される運命にある。そしてその宿命に身を投げた脆弱な姿の中にウィルは心を締めつけられる愛情を覚えるのである。又その娘アーシュラは初恋に溺れる娘であり，自分が女である事を初めて実感する彼女は，自分の置かれた位置すら意識していない。アントンと彼女は接吻を繰り返す中で，互の深い所で呼応し合ったのであるが，花の様に開いたアーシュラの生命の核の痛ましさの前でアントンは慾望と同時に苦痛を覚えてそこから身を引く事の空しさと残酷さを知る。そして，後に物語の最後でアントンとの決定的な訣別の苦しみから恢復して新しい夜明けを迎えたアーシュラが再びあえかな花に比へられている事をあげておこう。

When she woke at last it seemed as if a new day had come on the earth. How long, how long had she fought through the dust and obscurity, for this new dawn? How frail and fine and clear she felt, like the most fragile flower that opens in the end of winter. But the pole of night was turned and the dawn was coming in. (493)

Moynahan はリディアと花のイメージに関して次の様に言っている。「リディアの本質と花の本質とは同じものであり，もし彼女がもう一度明るみの中で花開きたいならば，暫くの間創造の根源である有機的本能的存在に還り，そこで新たな生命力で自らを充たさねばならないという含みがあるのだ。」[(4)]以上の事は本質的にその娘アンナ，孫娘アーシュラに当てはまる事は言うまでもない。

以上三代に亘る女性は，それぞれ経験と状況の違いはあるが，性の慾求の核の本質を開いた花の様に外気に触れさせる事により，その傷つきやすい生命に優しく触れずにはいられない切なさを読者に感じさせる点で共通しているのである。すべての男性がそれに応えてくれるわけではないが，性の存在の果無さといとほしさが肉体として描かれていて，そこにすべての基礎を置こうとしたロレンスの意図は明瞭に見て取れよう。ロレンスは生を単独に礼讃しているのではなく，互に呼応し合う弱さの故に慈しんでいる様に思われる。勿論これは『虹』という小説の出発点である事を忘れてはならないのだが，孤立した生命それ自体の脆弱さを認識する事が生命に対する優しさや喜こびや愛情の基礎となっている事は，単に男女間におけるだけでない事を言っておかねばならない。次の文は我子になじめなかった父親ウィルが次第に心を通わせ始めるきっかけを描いたものである。

One evening, suddenly, he saw the tiny, living thing rolling naked in the mother's lap, and he was sick, it was so utterly helpless and vulnerable and extraneous; in a world of hard surfaces

and varying altitudes, it lay vulnerable and naked at every point. Yet it was quite blithe. And yet, in its blind, awful crying, was there not the blind, far-off terror of its own vulnerable nakedness, the terror of being so utterly delivered over, helpless at every point. He could not bear to hear it crying. His heart strained and stood on guard against the whole universe.

But he waited for the dread of these days to pass; he saw the joy coming. (212)

赤子の生命も支えを要求する最たるものの一つであろう。その脆弱な赤裸々な生命は，生命のいとほしさそのものであって，それは赤子のころころした肉体そのものに他ならない。生命の核そのものとも言うべき赤子の肉体から発せられる泣き声は，露出されて極寒の大気の荊棘に傷ついた血の叫びの様にウィルには思われる。それは，かつて里帰りから戻って夫への愛に心を一杯にしてその庭仕事をほめた時，彼の無表情なうつろな眼を見て悲痛の涙を流したアンナの泣き声にその本質は等しい。彼女が呼応を求めて露わにした最も傷つきやすい生命の核をウィルは無残に踏み躙ったのであり，彼女は自分の子宮にしっかり手を当てて痛みをこらへようとする。赤子と同じ様にすべてを委ねて支えを求めたアンナは癒し難い傷を負って止め度なく涙を流す。

'Don't cry, my love,' he said, in the same abstract way. In his breast his heart burned like a torch, with suffering. He could not bear the desolateness of her crying. He would have soothed her with his blood. He heard the church clock chime, as if it touched him, and he waited in suspense for it to have gone by. It was quiet again. (156)

ここでウィルが感じる苦痛と堪え難さは先に引用した赤子へのものと類似し

ていると言えよう。それは無垢の生命が傷ついた事への深い憐れみであり，そこから人間の真のつながりが生じるものなのである。

陽光の中で開いている花に比へられた女性の生命を男性がどの様に愛するかが大きな問題の一つとなって来る。確かにその生命の根源は度々ロレンスが「傷つきやすい」（vulnerable）と形容する様に脆弱なものであるが，同時にそれは人間の全存在の活力を一点に集中した強さを持っていて，その前に立たされてその生命の蠢動に耐え得る事が男性に要求されるのである。それは，あるゆる観念を排した盲目の原始の生きた「物」との接触に耐え得る力と，それを慈しむ心とを要求し，自己の生命の核を同時に対象の前に怯まずに露出する事を要求する。それが『虹』の中でロレンスが男性の人物に課した問題の一つなのである。

トム・ブラングウィンの場合は，精神と肉体の分裂がさ程見られず，彼はリディアを知って後，自分の肉体の核にある慾求が結晶となってその輪郭を明らかにして来るのを待つ事が出来，性の接触を恐れながらもリリディアの肉体の重みを支える事ができた。だが彼のそうした力もいくつかの試錬を経て培われたのである。『息子と恋人』のポールの如くまだ母の支配下にあった19才の時，娼婦と同衾した彼を苦しめたのは先ずその行為の空しさと病気になりはしないかという事であった。だがそれを乗り越えて後に残ったものは，自己の内にある性的存在の本質とその現在置かれている状況の矛盾との本能的知覚であり，愛という事業への深刻な予感なのであった。リディアの存在に動揺を覚えた時，彼は鈍重な程に自己の問題の核心が見えて来るのを待って黙々と労働を続ける。

As he worked alone on the land, or sat up with his ewes at lambing time, the facts and material of his daily life fell away, leaving the kernel of his purpose clean. And then it came upon him that he would marry her and she would be his life.

Gradually, even without seeing her, he came to know her. He would have liked to think of her as of something given into his protection, like a child without parents. (40)

この時トムは28才である。だが，そのトムの継娘アンナと結婚する彼の甥のウィルはどうであったか。まだ20才になったばかりの彼は，二人の間にやがて結晶として沈澱するのであろう問題を一切考慮せずに，すべてを結婚に委ねてしまう。彼女との抱擁の中で既に，アンナが彼の肉体から生命の泉を汲み取っている間，自分の肉体が彼女の生の燃焼の場としてしか存在の意味がない事を意識し始める。そして結婚後，二人は外界から孤立した愉悦の生活を送るのだが，その中で早くもウィルはアンナとの肉体の葛藤から無意識のうちに尻込し始め，自分のもう一つの世界であり，アダムを神の如く，イヴを人形の如く造りあげる事のできる彫刻の中へと逃避し始めるのである。そこに彼の魂のひそかな羞恥があり，夫の中に自分の手の届かぬ何かを予感してアンナは心の痛みを覚える様になる。

ウィルがアンナの最も傷つきやすいところを踏み躙って，彼女が赤子の様に悲痛に泣くところは既に引用した。彼は自分の血の力で彼女の悲しみを癒すのだが，その後でロレンスは次の様に書ていいる。

When they came to themselves, the night was very dark. Two hours had gone by. They lay still and warm and weak, like the new-born, together. And there was a silence almost of the unborn. Only his heart was weeping happily, after the pain. He did not understand, he had yielded, given way. There *was* no understanding. There could be only acquiescence and submission, and tremulous wonder of consummation. (156)

ここには生命の最も深いものを通して触れ合った男女の結びつきの言語を越

えた完成がある。だが，自分は屈したのだというウィルの意識の中には，自分と妻との間に完成されたものの価値の深みを察し得ていない様子が感ぜられる。彼は男性としてなすべき最も肝要な事をなしたのであり，その至福の中に身を委ねていながら，自分の行為の緊張のもたらす苦痛と不安に耐えかねている彼は，恐らく妻との対等の接触を持続する事に耐え得ぬであろう事が予測されるのである。

雪に閉ざされた中でなお三日間二人は愛の生活を送るが，その後教会を訪れて二人の本質の相異が明らかになる。ウィルは教会の持つ崇高な気分に陶酔するのだが，アンナはそれに反感を覚え，ウィルが無視する牧師の説教に耳を傾けたりする。ウィルにとって人間や社会そのものの価値は第二義的なものなのであり，大文字によって抽象化された教会のもたらす感情こそが肝要なのである。こうして，宗教的な陶酔を求める彼の魂とアンナとの肉慾の満足を求める彼の肉体とは彼の中で分裂してしまい，彼の方から生命の核心での触れ合いを求める事はなくなってゆき，バンベルグ大聖堂の美術品の写真に魂の陶酔を見出したりする様になる。人間の世界を趣えた霊的なものに固執するウィルと人間の心を有りの儘に信じようとするアンナとの間で，こうして次第にその亀裂が大きくなってゆくのである。

問題は二人の性的関係にあり，束の間の快楽を重ねるうちにアンナは胎児を孕り，母性愛に浸る事によって次第に夫に対する勝利感を強めてゆく。一方ウィルは妻の懐胎によって一層孤立感を強める事になる。教会の与える陶酔を崇拝する彼はアンナの生命の核に触れる力を持たず，彼女の花の様な無垢な美しさ（flowery innocense）に耐え得ず，それを遠くから眺めている事しか出来ない。彼は懐胎によって充足してゆく妻に比べて，彼女を懐胎させた自分が男として成熟し切れない事が不安であり不満なのである。女性なしに成熟できない存在でありながら彼は女性以外のものに忠節を捧げようとする。その矛盾した二つの状態に奇妙な羞恥心と自尊心を同時に感じている彼は，肉体の生命から孤立した精神の弱さ故に孤独の罠に自ら陥って，妻との完全な性の交わりを求めなくなってしまうのである。

やがてウィルは，雪の中で飛び廻る小鳥達を眺めながら乳呑子に話しかけるアンナの明るい顔を見て，次の様な感慨に耽る。

.... What was the appeal it made to him, what was the question of her bright face,what was the challenge he was called to answer? He did not know. But as he stood there he felt some responsibility which made him glad, but uneasy, as if he must put out his own light. And he could not move as yet. (195)

ここには妻の自足した笑顔に対抗できる自己の充実した生命がない事に不安を覚える心と，その笑顔の存在が夫としての自分の手に委ねられたものである事への僅かな満足感とがあって，むしろ豊かな母性に身を委ねる妻への敗者的な媚態すら予感されるのである。

リンカン大聖堂での二人の体験は，それまで夫の持つ本質を見出し得ないでいたアンナに，自分に欠けている彼の魂の価値を認めさせ，ウィルには，教会という有限な世界の中で自己閉鎖的な陶酔に耽っていた自分とその彼の世界を越えたところに憧憬を馳せる妻アンナとの存在の大きさの差を悟らせたのであった。ウィルの精神と肉体は全く分裂してしまっていて，彼の精神的陶酔は肉体の裏付のない浮薄なものであり，彼の肉体は唯己れの慾望を満たす事だけを求める自己中心的なものに堕しているのである。母性の充足感を慈しむアンナにとっては，自分の肉体だけを求める夫の存在はもはやかつての如く怖れたり憎んだりする必要のないものであり，彼女の花の様な無垢な美しさを求めない夫は唯官能の歓びという暗闇の世界でのみ交わればよいのであった。既にお互は自分の存在の救済を与えてくれるものではないのである。ウィルはアンナの生命の核である花の様な無垢な美しさから眼をそむけ，アンナはウィルの魂の憧憬を見下して，お互の官能においてのみ陰微なつながりを持つようになる。映画館で知り合った少女との出来事が契機となってウィルはアンナの体にひそむあらゆる官能の美点の探索に専心するようになり，そこでようやく夫と妻と

は一種の調和を得るのだが，ウィルの魂の憧憬とアンナの無垢な生命の核とは宙に浮いた儘残される。その意味で二人は全くの他人同士なのである。

アーシュラの母アンナは豊饒な母性の中に没入し，父ウィルは妻の官能の豊かさの支配に身を委ねる事によって辛うじて生活を維持している。この父と母の間では，人間関係の核といったものが欠落していて，精神や肉体は各々のエゴの慾望にのみ動かされている。精神性というものを捨てたところに安住している母は論外として，教会に奉仕している父に於ても，それは精神と肉体のすべてをそこに賭けるといったものではなく，妻との官能的生活の中には精神の緊張や憧憬に結びつく創造性は見られず，その信仰態度は肉体の官能の極致の反作用によって生じたもので，その本質は魂の空虚さを陰蔽する事にあると思われる。聖堂の建物や美術品などにしか陶酔の対象を見出し得ない父の魂の中には，肉体に基盤を持たない覚束無さが見て取れ，そうした肉体と精神の分裂の中で苦しみ，その中で自分なりの歪んだ安定を見出してしまった父から，アーシュラは大きな影響を受けて成長するのである。

アーシュラが最初に父を通して学んだものは，孤立した生命の歪みであり，その執拗な慾求の生む緊張感であり，その無慈悲な残酷さであった，仕事場での父の様子を子供のアーシュラは次の様に見ていたのである。

He always went in silence. The child would push open the shed door, and see him working by lamplight, his sleeves rolled back. His clothes hung about him, carelessly, like mere wrapping. Inside, his body was concentrated with a flexible, charged power all of its own, isolated. From when she was a tiny child Ursula could remember his forearm, with its fine black hairs and its electric flexibility, working at the bench through swift, unnoticeable movements, always ambushed in a sort of silence. (217)

しなやかな腕の敏捷な動きの中には，流れる行先を探索するアンテナをめぐらせた張りつめた生命がひそんでいて，その孤独に耐えかねた陰微な力が幼いアーシュラの心を無意識のうちに痛めている。父のアーシュラに対する圧力は，父の娘に対する愛情というものではなく，男の女に対する圧迫であり，孤立した生命の慾求の苛立ちと浸透力とを持っていて，アーシュラの未だ眼醒めぬ本能に喰い入って熟さぬその芯を無残にも切り開こうとする。そこには妻との官能の生活には求められない，アーシュラの無垢な花の様な生命への盲目的な衝動が力を占めていて，彼女の存在を慈しむ眼醒めた優しさはないのである。だが幼いアーシュラは，自分が必要とされている父の心の空洞に自ら入ってゆこうとする。それは勿論盲目的な幼児の反応なのだが，少なくとも父によって自分の生命の核に震動を与えられた事を意味し，父自身が意識していない彼の生命の根源的な要求の切実さに全身で彼女は呼応したのである。父が決して伝える事のできない筈のある種の愛情がそこにあるかの如く彼女の心は父の後を追った，とロレンスは書いているが（221），そこには父の圧迫によって，むしろ彼女の心に愛情の萠芽が生じて，それに彼女が動かされている姿が見られるのである。

だが，その内部で精神と肉体が分裂している父の中では，アーシュラへの慾求と自己閉鎖とは相争って調和せず，自分の心の苛立や怒りを彼女にぶつける事をも敢てさせるのである。仕事場での娘アーシュラのいたずらを他人に責められて生じた怒りを彼女に向けて妻にたしなめられる彼は，しばしばアーシュラの心を傷つける。彼女の心は既に無意識ながら愛を知っているのであり，父のために尽したいと願う彼女は自分の中に，それが傷つく事によって自分の全存在が痛みに凝結するものがある事を父によって知らされるのである。

アーシュラに馬鈴薯の種植を手伝わせておきながら，自分が作業に夢中になると父は彼女の事は眼中になくなり，冷酷に彼女の仕事の手直しをして沈黙の儘作業に熱中する。途方に暮れた彼女は，自分は何の役にも立たたないのかという淋しさに襲われるのだが，その心に父は全く気付かない。こうして初めてのアーシュラの愛の行為は無に帰するのだが，あまつさえ，自己の内に閉じこ

もった父の魂は，その種床を彼女が踏みつけて遊んだ事に著しく傷つき，彼女を激しく叱責するのである。それによって彼女の幼い心がいかに痛むかに彼は気付かない。ロレンスは，彼女の小さな傷つきやすい魂は蔽いを剝ぎ取られ踏み躙られたのだ，と書いているのだが（233），この時既にアーシュラの自由奔放な魂は，自己の内に固く閉じこもって外敵から身を守る本能に眼醒めてしまったのであり，それは又裏面から見れば，自己の無垢な生命の核を保護する意識につながるものと言うべきであろう。

肉体の接触を求めていながら，心の接触は避けようとする父の拒絶的な冷酷さは妻に対する敗者意識に根を発するものなのだが，そこには異性の生命の強さに対する憎しみがひそんでいて，妻に対する反抗を娘のアーシュラに向けて解消しようという卑劣な心情すら動いているのである。それは，彼がアーシュラをぶらんこに乗せて激しく揺り動かし，恐怖に蒼白となった彼女に，「気分が悪くなったなんてお母さんに言うんじゃないよ」と説き伏せようとするところに(226)，最もよく現れていよう。

こうした事があって間もなく父は妻との官能の生活に没入するようになり，自分なりの生活の均衡を見出すのだが，父によって内に生じたものは更に深く彼女の中に根ざしてゆき，更に教区室を仕事場に改造してその仕事に専念しようとする父を通して，彼女は新しい刺激を受け始める，それが彼女が8才の時である。

> . . . The parish room was a high, stone, barn-like, ecclesiastical building standing away by itself in the Brangwen's second garden, across the lane. She was always attracted by its age and its stranded obsoleteness. (239)

古くから人間の中を流れる伝統が宗教的信仰への憧憬となってアーシュラの心に眼醒め，それが挫折して無力に見えるが故に一層彼女はそれを自分の中に蘇生させようという気持になる，そうした一つの暗示を上の引用の個所はもっ

ている様に思われる。そしてそのすぐ後に牧師と仕事の話をする父の姿を眺めながら彼女は，やはり自分が彼の持つ力に惹きつけられている事，特にその強い歌声に血が震える様な恍惚を覚えるを認めざるを得ない。それは父を通して宗教的憧憬がアーシュラの中に生き続けていると同時に，肉体的生命に対する憧憬という神秘も体内の暗闇の中に父によって生じている事を確認しているのだと考えてよかろう。「子供」と題する，アーシュラを初めて中心に据えたこの章は次の様に終っている。

> .... he was always a centre of magic and fascination to her, his voice, sounding out in command, cheerful, laconic, had always a twang in it that sent a thrill over her blood, and hypnotized her. She seemed to run in the shadow of some dark, potent secret of which she would not, of whose existence even she dared not become conscious, it cast such a spell over her, and so darkened her mind. (239)

宗教的雰囲気には比較的素直に惹かれている彼女が，肉体の中にある暗闇の力に対してはそれを重荷と感じるかの様に意識する事を避けようとしながらもその魔力の下に打たれている，その反応の相違には注目しておく必要がある。肉体は現に自分の存在そのものであり，しかも父の圧迫によって先ずアーシュラは肉体の接触を通して自己の存在とその苦痛を意識させられ一種の桎梏となっていたという事情があり，一方で宗教的感情というものは遠い手の届かぬものへの憧憬であるから，さし迫った苦悶を強いるものではない，という事情もある。或は又，肉体的存在の重荷が宗教的感情の萠芽を眼醒めさせて彼女の存在に均衡を生じさせたのだと見る事もできる。或は又，肉体的存在も宗教的感情の高さがあってこそ充実しうるものだという暗示であるかも知れない。少なくともアーシュラは人間を越えたところに魂の憧憬を持ち始めている事が感じられ，同時に肉体的存在としての自己の宿命の重さも避け難く彼女にのしかか

るであろう事が予測されるのである。

アーシュラの祖父に当るトム・ブラングウィンが洪水で溺死して物語は彼女を中心に描かれる。それは，祖母リディアがアーシュラの幼い問に答えて語る二人の夫と生活を共にした彼女の一生に耳を傾けながら，自分の中に流れる血の疼きをアーシュラが意識し始める形で進んでゆく。多くの人間が愛し合い，互に全き人間存在を求めて闘い合い，そしてあるものは自分なりの均衡を見出し，又あるものは空しく挫折する，そうした自分と同じ血を持った先輩達の織りなす過去の中に彼女は，深い共鳴と静けさを見出すのだのだが，それは自分の中に抑え難く蠢めいている生命の慾求が自分だけのものでなく，自分の血を通して時間の中を流れるものである事，自分の未来に予感されるものと同じ苦闘に全身を傾けた人々の姿を眼に見る様に感じる事への安堵感が生むものだと言えよう。ロレンスは次の様に書いている。

> .... She clung to her grandmother. Here was peace and security. Here, from her grandmother's peaceful room, the door opened on to the greater space, the past, which was so big, that all it contained seemed tiny ; loves and births and deaths, tiny units and features within a vast horizon. That was a great relief, to know the tiny importance of the individual, within the great past. (260)

ここには，個人の生命を宇宙の生命につながるものとしてみるロレンスの考え方と共に，その様に個人と宇宙との生命の対照を観る事によって自己のもつ生命と時間とを客観化し，その対照の中に一種の調和を感じとって自分の一生に対する不安を克服しようとするアーシュラの心の葛藤が既に見られるのである。彼女が自分を否応なく押し流してゆく生命の動きの中に調和乃至秩序を求めようとしている事は重要であり，それは宇宙の生命の中に自己を置いてみる事から来ているわけであるが，より本質的に言えば，個人の生命は孤立して無法則に荒れ狂うのではなく，他の個人の生命との触れ合いによって宇宙の生命

の中でこそその明晰な実体を持ち得るという事の証しなのだと言わねばならない。自己の中にのみ閉じこもらない事，常に流動的である事，そこに生命の本質があり，自己の本質を意識し，自己の世界に忠実になり始めたアーシュラは，多くの子供に囲まれて豊饒な母性に埋没した母の姿と，教区室の鍵をかけ忘れたからといって彼女の頬をはたきで打った父の態度とに，決定的な訣別を意識するのだが，そこには明晰な精神の自己認識を持たない母と，生命を孤立させて慈悲の心を失った父への強い反抗があったのである。明晰さと流動性へのアーシュラの本能的な志向は，父にはたきで打たれた後，生き生きと流れる小川や飛翔する小鳥などを愛する彼女の姿によく現われており，明晰さと流動性とはむしろ一つのものの表裏とすら感じられている。

> ..... She loved the little brooks. Wherever she found a little running water, she was happy. It seemed to make her run and sing in spirit along with it. She could sit for hours by a brook or stream, on the roots of the alders, and watch the water hasten dancing over the stones, or among the twigs of a fallen branch. Sometimes, little fish vanished before they had become real, like hallucinations, sometimes wagtails ran by the water's brink, sometimes other little birds came to drink. She saw a kingfisher darting blue — and then she was very happy. The kingfisher was the key to the magic world: he was witness of the order of enchantment. (268)

彼女は神秘的な世界を予感しながらも，そこに明晰な秩序感を見出しており，その秩序感は自己と宇宙との対照から来ているものと考えられる。彼女はこうした小鳥や小川の明晰な流動感の中に自分の生命の姿やその行末を見出す事によって，それぞれ明晰さと流動感を喪失した母と父の世界の精神の欠落と慈悲心の欠如とを克服しようとする。この時彼女は12才である。

やがて思春期を迎えるアーシュラの心にキリストへの憧憬と性への憧憬が重なり合って現われる事に注意せねばならない。

To her, Jesus was beautifully remote, shining in the distance, like a white moon at sunset, a crescent moon beckoning as it follows the sun, out of our ken. Sometimes dark clouds standing very far off, pricking up into a clear yellow band of sunset, of a winter evening, reminding her of Calvary, sometimes the full moon rising blood-red upon the hill terrified her with the knowledge that Christ was now dead, hanging heavy and on the Cross. (275)

白い満月が性的なもののシムボルに使われるのはロレンスにしばしば見られる事である。無論アーシュラはそれをはっきり自覚してはいないのだが，十字架に重くのしかかっているキリストの死体の幻想の中に行末の性の葛藤という宿命の重荷を無意識に予感しているのだと思われる。キリストも性もこの時の彼女には遠い世界のものであるが，肉体と宗教とを同一の次元でとらえようとするアーシュラ或はロレンス自身の特質が暗示されている事を忘れずにおきたい。勿論この時の彼女にとっては宗教的感情の方がより強く働いている事は明らかであり，性的感情は伏線となっているにすぎない。それは例えば，教会にいる時の彼女が半ば幻想の中で，「神の子等人の女子(むすめ)の美しきを見て其好む所の者を取て妻となせり……」[5]で始まる創生記の言葉を耳にするところによく現われており（276），異性を「神」の子として，自分を「人」の娘とするその表現の差異の中にも，宗教的感情に押されて潜在している性的感情の有様が見て取れるのである。

「神」の子への憧憬が「人」の子への憧憬に移ってゆくのはアーシュラが15才の時である。それは彼女が幻想の世界から現実に眼を移し始めた事を意味し，体内に熱い血が激しく流れている事をはっきり自覚し始めたという事なのであった。「人」の子の胸にこがれる自分に魂の奥底で羞恥を覚えた，とロレンス

は彼女の心を語っているが（286），依然として宗教的感情が彼女の中により強く生きている事は，彼女が単に肉体的なものだけでなく，それを通してそれを越えたものに対事る憧憬を常に失わないでいる事につながって，彼女の生活を動かす根本の原因となるのである。そして，羞恥を覚え，人に知られはしないかと案じた，という事の中には，宗教の世界に現実のものを持ち込んだという事より進んで，肉体の中にこそむしろ宗教の根源を見出そうとする自分の衝動に対する不安に満ちた無意識の反応とみるべきであろう。この時彼女の前にアントン・スクレベンスキーが現われるのである。

ここで，母の肉体への埋没に反感を覚え，父の無慈悲さに身を固くしたアーシュラがアントンとの間で両親の血を受け継いだ様な関係に近づいてゆく事に注意しておきたい。彼女の父は母の肉体の力の前に屈服しているのだが，同じ様にアントンはアーシュラの肉体の核を支える力を持っていない。既に何度か述べた「花の様な無垢な生命」を直視し，それに触れて支える力をアントンは持っておらず，アーシュラの中にある明晰な，流動的な生命感に圧倒されて，その前で敗者的な苦悶を覚えたりするのである。互の接触を経験した後で，自動車の中でアーシュラの体の圧迫を感じながら，アントンは苦悶に圧し潰されそうになっている。

But she was here with him in the car, close to him, and the wind was rushing on her lifted, eager face, blowing back the hair. He turned and looked at her, at her face clean as a chiselled thing, her hair chiselled back by the wind, her fine nose keen and lifted.

It was agony to him, seeing her swift and clean-cut and virgin. He wanted to kill himself, and throw his detested carcass at her feet. His desire to turn round on himself and rend himself was an agony to him (305)

毛髪が風になびいてはっきりした輪郭を見せている彼女の顔は生命の核の無

垢な傷つきやすさと強さとを同時に思わせて，その明晰な流動感がアントンに自己の生命への無力感を抱かせ，彼は自分の中に閉じこもってその無力な生命を引き裂いてしまいたい苦悶の衝動に襲われるのである。こうした彼の弱さをアーシュラは，自分が名付け親となりネックレースを贈った赤子の父親の，魂と肉体をもって接しようとする裸の態度に比べてはっきり意識する様になる。それは彼が唯彼女の肉体を欲するのみで全てを彼女に向けて来ない事への不満なのだが，注目すべきはそこからアントンに対する加虐的な闘争意識が眼醒める事である。自分の体にまつわりつく彼をむしろ煩しく思い，彼女の魂と肉体の核心は彼との抱擁の中でも彼を越えて月の光と一つになって裸の身を曝しているのであった。彼の彼女に対する慾望と彼女の有りの儘の存在の核との間には冷い隙き間があって，それを埋めて裸の接触に入ろうとしないでアントンに対するもどかしさが募ってやがてそれが反抗心に変ってゆくのである。

And temerously, his hands went over her, over the salt, compact brilliance of her body. If he could but have her, how he would enjoy her! If he could but net her brilliant, cold, salt-burning body in the soft iron of his own hands, net her, capture her, hold her down, how madly he would enjoy her. He strove subtly, but with all his energy, to enclose her, to have her. And always she was burning and brilliant and hard as salt, and deadly. Yet obstinately, all his flesh burning and corroding, as if he were invaded by some consuming, scathing poison, still he persisted, thinking at last he might overcome her. (321)

ここには我儘な征服慾や陰湿な吸収慾があって，互の生命を慈しむ心を見る事はできない。そしてアントンの中にはアーシュラの父ウィルに似た本質的な生命の弱さが感じられ，アーシュラの中には母アンナの異性の上に君臨せんとする肉体の我慾が感じられるのである。

やがてアーシュラが肉体の上でアントンを蹂躙して自分の魂だけがぽつんと取り残されているのを知った時，初めて彼女の心に自分の行為の空しさと自分の慾望の深さへの不安な想いがしのび込んで来る。

.... What had happened?Had she been mad: what horrible thing had possessed her? She was filled with overpowering fear of herself, overpowering desire that it should not be, that other burning, corrosive self. She was seized with a frenzied desire that what had been should never be remembered, never be thought of, never be for one moment allowed possible. She denied it with all her might. With all her might she turned away from it.'(322)

自分がたった今終えた行為を決して一瞬たりとも思い出してはならないという彼女の願いは，母性に埋没して父の上に君臨している母への批判から我身を顧みて出た思いとも見る事が出来よう。しかしより深く見るならば，それは自己の生命の核にある「無垢な傷つきやすい花の様な」本質を愛撫される事なく，それを自らアントンに与える事もなく時が過ぎてしまった事への，悔恨と悲哀の想いであったというべきであろう。そこには，自己の生命の核にある慾望の果て知れぬ深さの予感と，優しくそこに触れて貰えなかった寂寞感とが錯綜していて，その二つの確かな実感からアーシュラは生命の本質の認識へ厳粛に近づいたのだと見る事ができる。この後彼女は消耗し尽したアントンに優しく働きかけるのだが，そこには打ち砕かれた彼の生命に対する心の痛みと憐愍とがあり，更に深い意味で，自己の生命の虚しい悲しさを忘れようとする心が動いているのだと言えよう。つまり彼女は彼を通して自分の悲しみを癒そうとしたのである。この事は，彼と別れて自室のベッドに戻った彼女が次の様に描かれている事からも見て取る事ができる。

But there was a wound of sorrow, she had hurt herself, as if she

had bruised herself, in annihilating him. She covered up her two young breasts with her hands, covering them to herself; and covering herself with herself, she crouched in bed, to sleep. (324)

アントンの生命を崩壊させた事が自分の生命を傷つけた事につながるのは，宇宙の生命への慈しみの心が本能的に働いているからであり，彼女が自分の乳房を抱きしめる事によってその宇宙の生命の悲しみを癒す他なかったところに，彼女の知らずに陥っている孤独の深さがあったのである。

ここでアーシュラがアントンとの間に感ずる虚しさが何に由来するかを考え直してみる必要がある。アントンが自己の慾望の満足にのみ走って，彼女の生命の核に触れる力がない事にその要因がある事は既に述べた。だが一方，アーシュラはアントンの肉体をどう見ていたか。国家や共同体の存在を個人の魂に優先させ，彼女を残して南アフリカに従軍する彼の生き方が彼女に彼の存在の深い虚しさを感じさせ，それがまだ若い彼女にとって男女の結びつきの本質的な意味そのものに対する虚しさや不安につながるものであったという事は理解できる。しかしここで重要な事は，そうしたアントンの思想や観念を越えたところに彼の肉体という「物」が厳存していて，それをアーシュラは愛していた筈ではないかという事なのである。

肉体の慾望という矮小な自我の衝動によってのみアーシュラに触れようとするアントンを彼女が精神的な加虐性をもって敗北させようとする事は既に述べたが，彼女が意識すると否とに拘らず，二人の接触には又別のより基本的な要素が隠されていた筈だと思われるのである。彼がアフリカに出征する直前に次の様なところがある。

Ursula caressed him and made love to him. Nevertheless he knew she wanted to react upon him and to destroy his being. She was not with him, she was against him. But her making love to him, her complete admiration of him, in open life, gratified him. (326)

これは無論アントンの立場から書かれたものだが，そこにやはり彼の肉体そのものに対するアーシュラの愛情が土台として潜んでいるのであって，彼の肉体が消え去る事は彼女にとって自己の存在そのものの虚しさを抱き込むに等しい事がやがて明らかにされるのである。

彼に去られる事によって自分の存在が宙に浮いた儘挫折してしまう事を知った彼女は，そうした状態の行末を感じ取って，時折夢中になって，わたしはアントンが好きなのだ，と叫ぶのだが（330），それは彼との肉体的接触の実感から出た言葉なのであり，彼女の盲目的な錯覚などでは決してなく，盲目的である故にむしろ動かし難い真実なのである。そして重要な事は，その言葉の真実性が，彼女が彼に必ず自分のところに戻って来るように懇願し，彼がその様に約束して，二人は後に再び関係を取戻す事によって証明されるというところにあるのではなくて，後に再び彼の肉体への愛を取り戻しながら結局は最終的な愛の破滅に至らざるを得なくなるアーシュラの内部にあるマイナスの要因がここに既に暗示されているという事なのである。暗示されているというのは，肉体への愛だけでは満足できない魂の慾求が彼女の中に強く根を張り始めており，そのために肉体への愛が隅に押しやられてその明確な認識が妨げられている事を意味する。ロレンスがそれを意識していたか否かはともかく，アントンの肉体を失う事によって自分の存在が宙に浮く事を本能的にでもアーシュラに悟らせておきながら，一方で作者は，彼女は自分の魂のどこかに全く冷淡に反応する何かがあるのを感じ，彼は単に彼女の慾望の中にしか残っていないのだ，と思う（333），その様に描いているのである。この「慾望の中にしか残っていない」という彼女の感覚は，アントンが彼女を肉体の慾望を通してしか愛していない事実とは異質のものである事に留意しておかねばならない。勿論その事を小説のこの段階で明白にする程ロレンスは確かな意図を持って描いてはいないのだが，アントンへの肉体的愛を利己的な慾望にすぎないと信じ込んだところにアーシュラの魂の持つ慾求の強さとそれの生み出す肉体の慾求の認識への錯誤が見てとれるのである。言い換えれば，彼女の両親に見られた肉体と精神の分裂の相がここで既にアーシュラの中にその兆を見せているというべきであ

り，それは単なる分裂というよりは，二つのものの葛藤というべきである故に，より本質的な意味をもっていると言わねばならない。肉体と精神（或は魂）が一人の人間の中に同時に深く根を張って自己主張しながら相争う重荷が彼女に振りかかり始めているのである。

ロレンスはしかし，直ちに彼女にこの困難な問題に向わせず，ウィニフレッド・インガーとの同性愛的な接触，教員としての社会生活，という二つの体験を経させる事によって，アントンへの肉体的愛の持つ意味の大きさを改めて彼女に認識させる方法をとっている。それがどの程度作者の意図した方法であったかはともかく，やがてアーシュラにアントンとの肉体の接触を回復させている事の中に作者の窮極の意図を見出しておかねばならない。同性愛や教員生活が彼女を襲い始めていた問題に対する本質的な対処ではない事は，この二つのエピソードが始まる前に作者が彼女の特質を次の様に語っているところに既に予め見えているのである。

> ..... She was always a woman, and what she could not get because she was a human being, fellow to the rest of mankind, she would get because she was a female, other than the man. In her femaleness she felt a secret riches, a reserve, she had always the price of freedom.
>
> However,she was sufficiently reserved about this last resource. The other things should be tried first. There was the mysterious man's world to be adventured upon, the world of daily work and duty, and existence as a working member of the community. (334)

この後半の文章は特に，これからの二つのエピソードがやがて来るのであろう彼女の本質的な性体験への高まりを反動によって強める間奏曲の様なものである事を示していると言ってよかろう。そうした一種の迂回した態度を作者の創作意図の混乱と見る事はできるであろうし，アーシュラが同じ相手のアント

ンに戻って行く事にも無駄な重複を感じる事もできよう。がしかし，再びアントンを登場させる事によってロレンスが，アーシュラの彼に対する肉体的愛の本質に改めて明確に思い至り，魂と肉体の葛藤という純一なテーマへと直進して行ったのだとも言えるのである。

アーシュラがアントンの肉体を愛していたという事は単にその外観や感触によるものだけでなく，更に本質的な意味においてである。別れて6年後に再会を願う彼からの手紙を受け取った時に，彼女を襲ったのは自然な喜こびの発露ではなく，喜こびに踊ったのは彼を忘れまいとする彼女の意志の力であった，とロレンスは書いている（439)。そこには彼の肉体に対する古い夢や慾望が蘇っているのだが，同時に既に彼の存在の本質をある程度見抜いていたアーシュラがやがて繰り返されるであろう彼との関係の行きつく所を直感している事は疑えないのである。それは，彼の肉体に対する自分の愛は疑いの余地のないものであるけれども，それを越えたところに自分を導いてゆく魂の力が彼に欠けている事への，根強く潜在している確信から来たものだと言えよう。それは例えば，彼に応諾の返事を出した後の彼女の心をロレンスが次の様に描いている事から察せられる。

> .... When it was dropped into the pillar-box, the world became a very still, pale place, without confines. She wandered back to college, to her pale dream, like a first wan light of dawn. (440)

この「青白い夢」という表現のもつニュアンスは，明るい夜明けを思わせると同時に，そこに冷たい幻滅を含んだ行く手を感じさせるものでもある。だがとにかく手紙は投函されたのである。

再開された二人の関係には，指輪と写真を交換して別れたかつての甘さはない。互に，男である事，女である事の根源に於て触れ合っているのだと言える。口髭をたくわえて逞ましく成長した彼の姿は彼女に満足感を与える。そこ

にはウィニフレッド・インガーの持つ女の体の不明瞭な粘着力はなく，精悍な明確な輪郭があり，確かな存在の実感が得られるのである。

She became proud and erect, like a flower, putting itself forth in its proper strength. His warmth invigorated her. His beauty of form, which seemed to glow out in contrast with the rest of people, made her proud. It was like deference to her, and made her feel as if she represented before him all the grace and flower of humanity. She was no mere Ursula Brangwen. She was Woman, she was the whole of Woman in the human order. All-containing, universal, how should she be limited to individuality? (444)

「花」のイメージが持つ意味は既に述べた通りであり，ここでアーシュラは自分が花の如く毅然と生命を堅持する事によって宇宙における人間の力を高揚している如く感じるのである。それは確かに，彼女の内にある最も深い憧憬への第一歩となり得るものであり，この時真に彼女は，単なる6年前の繰り返しではない現実の男女の世界へ足を踏み入れ始めたのだと言えよう。ここではまだ彼女は魂の認識を呼び起してはおらず，肉体の官能にすべてを委ねているにすぎない。

He kissed her, with his soft, enveloping kisses, and she responded to them completely, her mind, her soul gone out. Darkness cleaving to darkness, she hung close to him, pressed herself into soft flow of his kiss, pressed herself down, down to the source and core of his kiss, herself covered and enveloped in the warm, fecund flow of his kiss, that travelled over her, flowed over her, covered her, flowed over the last fibre of her, so they were one stream, one dark fecundity, and she clung at the core of him, with her lips holding open

the very bottommost source of him. (446～7)

これはかつて祖父母トムとリディア，両親ウィルとアンナが何らかの形で到達していた結びつきであり，アーシュラはようやくそこまでやって来た事になる。ここから先の進む道が彼女自身のものなのである。アントンは祖父トムと異って肉体を支える精神の力を持っていないし，アーシュラは母アンナと異って母性という肉体の世界に安住する事はできない。だがいずれにしても，とにかく彼女は肉体の根源に於てアントンと触れ合う事によって自己の内に確固とした独自の力を持つ事ができたのである。彼女はこの後，アントンの持つ世界の狭さに自分を順応させる事に耐え得ず彼を捨ててゆくのだが，そうした彼を捨てるだけの認識に到達するにはそれだけの力の充実が必要であり，その力が本来彼女の内に備わっていたものであるとしても，アントンとの肉体の愛の礎があったからこそ彼女の魂の憧憬は現実の生き方としての力を持ち得るに至ったのだと見なければならない。魂の憧憬といっても，ロレンスはそれをあくまで肉体の生命との係わり合いの上でとらえようとしており，そうする事によって肉体の生命に普遍性と拡がりを持たせようとしているのである。

かつて祖母リディアがアーシュラに前夫との想い出を語った時，孫娘に向って彼女は次の様に言っている。

> She could not subscribe. He had failed, everything had failed, yet behind the failure was the unyielding passion of life. The individual effort might fail, but not the human joy. She belonged to the human joy. (258)

この「人間の喜こび」がどんなものであるかは，読者は作品全体を読み通す事によってしか知る事はできない。それが明確に判別しうるものであるかどうか，判別しうる様に充分に描かれているかどうかはともかくとして，ロレンスはそれに，単なる人間の孤立した喜こびではなく，宇宙の時間や空間に普遍的

に存在する生命に合一せんとする個人の生命のあり方を意味させているのだと考えられる。祖母リディアの血がアーシュラにも流れていて，その喜こびの享受への欲求が時間の中を流れてゆくのだが，その連続した時間の流れの中にいる自分を意識してこそ人間は自己の慾望や喜こびは宇宙の生命と一つになり得るという事なのであろう。ここには肉体そのものではない抽象的なものへの憧憬が働いているのだが，その宗教的とも言える観念の求めるものを具体性をもった実体として把握せずにはおかない執拗な力がひそんでいるのである。それは，単なる肉体的存在のもつ時間的空間的な有限性を越えようとするものである故に，しばしば肉体を踏み台にせんとする過酷さをもつ事があり，一つの欲求の満足の後に更に深い慾求を内から生み出す本質を持つものだと言う事ができる。

例えばパリからロンドンへの帰途，ルーアンの町でアーシュラとアントンが互の求めるものの次元の差を感じるところがある。アーシュラは町の古びた街並や伽藍の経て来た長い時間の中に否定し難い現実性を感じ，その絶対的な荘厳さの前で，アントンとの有限な関係の中にしか存在し得ていない自分に失望して遣る瀬なく遠い憧憬に沈むのである。その遠さは過去と未来を同時に含んだものだと言えよう。

空間的に見ても，アーシュラはアントンの一個の肉体を越えて憧憬を走らせている。広大な海の拡がりを見て，自分の中に新しい魂の慾求を覚えて彼女は心の叫びを耳にし（433），広野を見渡す高台で風と雲と陽光に肢体を曝しては走り去る汽車や村の姿の矮小さに想いを至したりするのである（464）。だが，これは単に雄大な自然の懐に入って平安を得るといった静的なものではなく，それによって彼女はアントンの肉体に感じる事のできない魂の遠い憧憬に導かれているのだと言わねばならない。むしろ，アントンとの有限な息苦しい緊張した関係から，広大な伸びやかな宇宙の生命へと自らを開放させる働きを持つものなのである。オックスフォード附近の田舎家で甘美な三日間をアントンと過した後，アーシュラの心をロレンスは次の様に描いている。

.... But the thing she remembered most was when, getting up in the morning after he had gone back quietly to his own room, having spent the night with her, she found herself very rich in being alone, and enjoying to the full her solitary room, she drew up her blind and saw the plum-trees in the garden below all glittering and snowy and delighted with the sunshine, in full bloom under a blue sky. They threw out their blossom, they flung it about under the blue heavens,the whitest blossom! How excited it made her. (459)

ここではアントンとの閉鎖的な接触から広い空間へと自分を投げ出しているだけでなく，その広い空の下に開き切った白い花を見る事によってアーシュラは自分のあるべき姿をそこに見ているのである。アントンが去って一人になってからようやく彼女は自分の豊かさを感じるのだが，それは，アントンの肉体を踏み台にして初めて彼女が自分の魂の憧憬に近づいているからであり，そこにこそ自分の本当の求めるものがあるからに他ならない。だが勿論彼女はそこに到達しているわけではなく，青空の下の白い花に自分のあるべき姿を仮託しているにすぎない。その新しい喜こびは，アントンが去っても彼が与えてくれる光の中に身を委ねるだけで満足していた娘の頃と同様に（306），次元こそ違うが，魂の憧憬に自分を委ねるだけの満足感なのである。アントンという男は，肉体を通過してしまったところにはもはや存在せず，彼女はルーアンの古びた街並に時間の次元を置き換えた様に広大な海や空に空間の次元を移して魂の欠落したアントンによって生じた自己の慾求の空隙を満たしていたにすぎないのである。

アントンの留守中，彼女は友人マギーの兄アントニーに想いを寄せられる。彼によってある種の官能を刺激されはするものの，魂を持たない彼の中に自分の求めるものを見出し得ない彼女は，癒し難い孤独を感じ，男をその官能の充足の中に埋没させた儘残して去ってゆく永遠の旅行者の様に自分を考える。そ

して，そのアントニーから視線を反らせて，暗く沈んだ雪を蔽う夕焼けの空に月が美しく昇ってゆくのを見つめながら次の様に考えるのである。

> .... All this so beautiful, all this so lovely! He did not see it. He was one with it. But she saw it, and was one with it. Her seeing separated them infinitely. (416～7)

これは，肉体の結びつきは同等にもっていても，それを越えた魂の憧憬の拡がりをもっているか否かによって互に相手に満足できるかどうかが左右される事を言ったものだが，この時アーシュラはやがて再び関係をもつアントンの事を考えていないとしても，後の体験で以上のアントニーとの関係の本質がアントンの場合にも結局真実であった事になると言ってよかろう。

肉体にとどまっているアントンは従ってアーシュラの魂の慾求の時間と空間の奥行きを知る事ができない。その意味で彼女より彼の方がより多く自分を相手の前に投げ出していると言ってよい。彼の肉体の美しさには充分惹かれていながら，肉体の欲求を満たすだけですっかり自足してしまっている彼の姿に彼女は自分との距離感を覚えるのだが，一方彼はすべてを彼女に委せ切ってようやく彼女の慾求の一部に喰い込み，より大きな魂の慾求へと彼女を送り出す契機となっているにすぎない感がある。男性としての肉体とその慾求とをすべてアーシュラの前に曝した彼の姿にはすべてを投げ出したもののもつ弱さや哀れさがある。それを見棄てる事は余りに冷酷であり，又アーシュラの中にもそれに応える同様の慾求があり，奥行きと余裕を持つ彼女には彼の置かれている状況がよく理解され，その心に同情の気持が生まれるのである。だが肉体の頂点に達してみると，彼はすべてを満たして自己完結の閉ざされた姿になっている。彼女の慾求はその静かに固まってしまった彼を越えて広い世界に動き出し，取り残された彼との間に否応なく距離感が入り込んで来る。彼と結ばれた後，体はまだ彼に抱かれていながら彼女の心は遠い世界への憧憬にしばしば身を委ねてしまうのである。

この様に見てくると，二人の間に対等の関係が成立しないのは，単にアントンに魂の慾求が欠けているからだけでなく，アーシュラの抱く深い慾求そのものが本質的にアントンの存在と無関係に動いてゆくものであるからの様にも思われてくる。その慾求は他の人間との関係に対する，或はそれに基づく，ものであるというよりは，むしろそれを契機として，或は手段として，増長してゆくものと考えられるからである。現実にそこに存在するものと自己との関係から生まれるものへの慾求を踏み越えて，自らの慾求を自己栽培してゆくかの如き特質を彼女の魂は持っていると思われる。無論萠芽としては幼時のうちから持っていたものであるとしても，アントンという現実の肉体を踏み越えた後，まだ見ぬものへの憧憬をまだ見ぬものとの関係の中に空想して自ら自己を養い育ててゆくかの如くなのである。

The trouble began at evening. Then a yearning for something unknown came over her, a passion for something she knew not what. She would walk the foreshore alone after dusk, expecting, expecting something, as if she had gone to a rendezvous. The salt, bitter passion of the sea, its indifference to the earth, its swinging, definite motion, its strength, its attack, and its salt burning, seemed to provoke her to a pitch of madness, tantalizing her with vast suggestions of fulfilment. And then, for personification, would come Skrebensky, Skrebensky, whom she knew, whom she was fond of, who was attractive, but whose soul could not contain her in its waves of strength, nor his breast compel her in burning, salty passion. (478)

ここでは海の慾望が，大地の上に波打っていながらその大地の慾望を冷淡に踏み越えて自らを高みに揚げんと自分を鞭打つ姿が描かれていて，その海の慾望は大地との関係の上に成立しているのではなく，それを踏み台にした上でよ

り高いものに到達せんとする孤立した自己運動の様に思われるのである。アーシュラの求めるものもそうした孤立した自己内の活力によってむしろ動かされるものに思われる。それでいながら彼女は，やはりそこに異性の必要性を認めてアントンの事を思わざるを得ない。そこに彼女の悲しさがあり，自分に相応しい男性との出会いを待つ形でロレンスは結んでいるのだが，だからといって魂を持った男性が現れれば彼女の憧憬は満たされるのだという事が確信されるところまでは物語は進んでゆかないのである。

彼女はアントンとの関係の行く末を予感していた筈だという事は既に述べたが，それでもやはり彼との再会は必要であったのであり，なぜならロレンスは肉体の愛を契機としなければ魂と魂との対等の結びつきは有り得ないとする立場にあると思われるからである。彼女はとにかく行けるところまで行ってみねばならず，アントンから得るべきものは得ねばならず，彼への肉体の愛はその行く末がどうあろうともその時の彼女にとって必要だったのであり，だからこそ彼の肉体は彼に女としての独立した自信を与える力を持ち得たのであり，従ってアントンを捨てる力をアーシュラに与えたのは他ならぬアントン自身であったと見る事もできるのである。

残る疑問は，彼女の抱く魂の憧憬とは具体的に一体どんなものなのだろうかという事である。ロレンスは虹というイメージによって天と地を包含した宇宙の生命との合一を意図している様であるが，肉体という確固としたものを越えたところにどんな実体があり得るのか，依然として解かれない謎なのである。作者はそれへの憧憬までで筆を擱いてしまった様である。

両性の中にひそみ，それぞれの生命の核をなす原形質的なものが呼応し合って互の慾求を感得し，それに応ずる自己の力の眼醒めを覚える事，それが他者の認識であり，同時にそれを通しての自己の認識でもあった。そこから異質の生命の触れ合いによる親密さと優しさとが生まれ，明るい既知の世界からその奥にある未知の闇の世界へと足を踏み入れる事，それがアーシュラの求めたものである。

だが彼女はアントンの中に異質な生命としての他者を見る事はできても，未知の闇の世界を見出す事はできない。逆に彼の方は，アーシュラの異質の生命の直視に耐える事ができない。自己の慾望の満足によってのみ動く彼は，未知の世界に入る契機を内に持っておらず，アーシュラのもつ闇の世界の不可思議な力の前に狼狽して腑甲斐なく萎縮してしまう。言わば彼は，「傷つきやすい無垢な花の如く開いた」彼女の生命の核の明晰さと流動性に対抗する力を持たぬ故に，自分が優位に立つことのできる結婚の道を選んだのだと言えよう。だが二人の関係の破綻を他の面から見れば，アーシュラも又アントンの中にある異質な生命の核を自ら捨てて，それと自分との間に成立していた世界より更に高い（と彼女の考える）世界への踏み台にしたのだと言う事ができる。

彼女が彼を捨てた根本の要因は彼女にとって彼を通しての自己認識に限界があった事にある。肉体の情熱だけに身を委ねる盲目的な若さは既に彼女にはなく，又それだけで充足するには彼女の生への慾求は大きすぎる。彼女は肉体の情熱だけを求める事の虚しさを認識するに至っていて，その情熱を避けるのではなくそれを克服する事によってアントンが与える自己認識の限界を超えようとするのである。Kenneth Young はそのロレンス論の中で，「実際，性は，我々人間の個我的な深い孤独に対する我々の自覚，言い換えれば，大抵の人間はランプが照らし出す，わずかばかりの光の中で，生活しているにすぎなく，あとはすべて暗闇であるという自覚を，一層強めるにすぎないのである[6]」と言い，そこに性交の後の悲しみがあるのだとする。アーシュラの目的は Young の言う暗闇に足を踏み入れる事によって孤独を追い払う事であり，又性交の後の悲しみを克服する事であったと言えよう。

性交の後の悲しさは肉体の次元にとどまっているかぎりは取るに足らないものであり，そこに精神や魂の次元を持ち込む時に否応なく生じるものであり，アーシュラの難しさは，そこに失われた魂の次元を取り戻そうとした事にあるのだとも言えるのである。彼女の肉体によって完全に満たされているアントンの完結した姿の中には，彼女の中に生じているその悲しさを見出す事はできない。そこに二人の決定的な懸隔が生じるのである。

ここで次の点に注意を喚起しておきたい。肉体的存在の中に人間の精神的存在の基礎をおくのがロレンスの根本の考え方と見てよいのだが，その場合二通りの見方がある。一つは，肉体と精神とを全く同次元に置いて肉体そのものの働きの中に精神の活動を見出す事であり，他の一つは，精神の方をより高い次元に置いて，そこに到達するために肉体の次元を踏み台にせねばならないと考える事である。ロレンスはアーシュラを通して，前者を捨て後者を取っている如く思われる。何故なら，彼女は肉体の親密な接触の彼方にあるものを希求しており，他方ではアントンの肉体そのものが「物」として持つ美しさやそれの与えるものを彼女は充分評価しているのであるから，そこに彼女の最も深い喜こびを与えようとせず，その原因を彼が彼女と同様の肉体を越えた魂を持っていない事に帰している作者ロレンスの描き方は，肉体を魂のための踏み台にしている事の証しであると考えられるのである。

一方彼の肉体の美しさは彼女が充分に陶酔できるものであり，彼女はそれを捨てるのであるから，肉体と精神（或は魂）とは明確にその次元を分離されている事になる。「物」として充分に美しい生命の力を持つ事の中に彼女の求める魂の存在が含まれていないならば，より極端に言って「物」としての肉体の美しい生命そのものが即魂の存在の確証でないならば，肉体と魂とは明らかに異った次元のものという事にならざるを得ないのである。

F.R. Leavis の言う如く，「個人や愛や性を超えたものに呼応する」[(7)]事がアーシュラの求めるものであったとすれば，彼女はアントンにないものねだりをしていたわけであり，自分の慾求通りに勝手に彼を造りあげようとしていた事を彼女は反省し，神が創造した男の出現を待つ事に物語はなっている。その男とは魂の憧憬を持った男の意味であろうが，それではアントンは神によって創造された男ではないのかという疑問を提出してみれば，彼はアーシュラに肉体的存在の確信を与えるだけの傀儡にすぎなかった事になり，肉体と魂の次元が分離されている事が一層明らかになるであろう。Moynahan が「自我というものについての本質的な真理を説き明かす意図をもって始めていながら，ロレンスは人物を二つの相容れない存在の段階に分離する事に成功しているだけなの

だ[8]」と言うのは，同様の観察と見てよいであろう。その相容れない二つの次元のものを一つに結ぶには至っていないのである。アントンの様な人間が実察に存在するか否かはともかく，ロレンスが肉体のしかるべき接触そのものに最も高い人間の憧憬をおいたのではなく，肉体を契機とはしているがそれを超えたところにおいている事が重要なのである。

ロレンスは肉体的生命の核の触れ合いから出発させたのであるが，それを横の平面的次元として考えた場合，アーシュラの求める魂の憧憬は縦の垂直的次元への飛躍と考える事ができる。それは，彼女の内部における肉体から魂への質の転移という上下の移動であるだけでなく，彼女の背負った魂の憧憬はいくつかの世代を流れて彼女の中に生きているものなのであるから，そうした大きな時間の中でも彼女は，祖父母や両親がなし得なかったことを，意識すると否とに拘らず，完成する宿命を縦の次元で持っている事をも意味するのである。アーシュラの両親ウィルとアンナの結婚式の時，祖父トムは妻リディアと自分の姿を次の様に考えた事があった。

> .... When did one come to an end? In which direction was it finished? There was no end, no finish, only this roaring vast space.
> ..... How rich and splendid his own life was, red and burning and blazing and sporting itself in the dark meshes of his body: and his wife, how she glowed and burned dark within her meshes! Always it was so unfinished and unformed! (135)

トムもリディアも自分なりに充分に人生を生きた人達である。だが，いかに自分の人生が光に輝いたものであっても，一人一人の人間の生命が満たし得るものが取るに足らぬ小さなものだという認識は，単に広大な宇宙という空間の中で人間の占める部分がいかに矮小であるかという事にとどまっているものではない。トムが妻リディアの中にみた未完成な姿は，彼女の生命の小さな事を言うよりむしろ，かつての自分達と同じ様に新しい生活に入る娘夫婦の姿の中

に自分達と同じ生命の力が受け継がれてゆく事への感慨と共に，宇宙の生命が流れる時間の中で人間の生命の占める部分がいかに小さなものであるかという感慨に照らされた姿だというべきであろう。宇宙の生命が，宇宙の中で空間的にも時間的にも僅かな部分しか占め得ない人間を通して流れ感得されてゆくものである以上，一人一人の人間の未完成な矮小さは宿命的なものであらざるを得ない。そうした中でアーシュラは，与えられた空間の平面内で宇宙の生命を自己の中に実現する事だけでなく，いくつかの世代を通して自分の中に流れている生命を，与えられた時間の中で実現する事によって，一つの期を画する象徴的な使命を負わされているのだと言わねばならない。

彼女をその様な人物にした奥には無論作者ロレンスの宗教的使命観があると見なければならず，同時に又ロレンスが肉体の中に宗教の根源を見出そうとしていた事も認めなければならない。だが，それは肉体を通してそれ以外の世界に到達するという意味ではなく，肉体の世界そのものに宗教的な到達点を見出す事であった筈である。少なくとも物語はそうした方向で始まり進行して来ている。アントンを，個人の生命より国家の衰運を重んずる支配階級の象徴として描かれているのだと考える事はできる。だが彼がそういう人間である事は初めから読者に対して設定されている事であり，アーシュラが自己の慾求に忠実に生きる限り二人の関係の破綻も当初から予期され得る事なのである。だがそれにも拘らずロレンスが再び彼を登場させ，読者も二人の肉体の結びつきそのものの中に希望を抱き続けるのは，彼が充分な肉体の美しさを持った人間として描かれ，アーシュラにもそれを充分認めさせているからに他ならない。もし肉体の中に人間を救う宗教の根源があるならば，それはあくまで「物」としての肉体でなければならず，アントンの肉体はいかにもその様に描かれていると思われるのである。勿論彼はアーシュラの生命の核に触れる力を持たず，個人より国家を重んずる思想の持主なのだが，それならばそういう人間の肉体が何故それ程にアーシュラに美しく見えるのかが理解されない。アントンの肉体の美しさは張り子の虎のそれでは決してないのである。まだ少女だったアーシュラが彼に惹かれるところで次の様な描写がある。

..... Whether he had brains or not, he was interesting. His directness attracted her, his independent motion. She was aware of the movement of his life over against her. (290～1)

ここに描かれている青年は単に肉体の慾望だけに走る存在ではなく，自己の体にひそむ宇宙の生命の蠢めきに無意識のうちに身を委ねる動かし難い性的存在である。やがてアーシュラの魂は彼に不満を覚える様になるのだが，再開後の二人が関係を持つところで次の様な描写がある。

..... She watched him as he bathed, his quick, unconscious movements, the electric light glinting on his wet shoulders. He stood out of the bath, his hair all washed flat over his forehead, and pressed the water out of his eyes. He was slender, and, to her, perfect, a clean, straight-cut youth, without a grain of superfluous body. The brown hair on his body was soft and fine and adorable, he was all beautifully flushed, as he stood in the white bath-apartment. (455)

このアーシュラは自分が男爵夫人となってインドに赴く夢などを見ている時であり，このすぐ後に既に述べたルーアンでの二人の本質の相異が明らかになるのだが，アントンに対する彼女のこうした見方が二人の間に深く定着しているものである事に疑いはないのである。それは彼女の魂の感じる彼への不満の増長に比例する如く大きくなってゆき，終にはその相反する二つのものが極端な形となって向き合うに重る。

When breakfast was over, she lay still again on the pillows, whilst he went throngh his toilet. She watched him, as he sponged himself, and quickly dried himself with the towel. His body was

beautiful, his movements intent and quick, she admired him and she appreciated him without reserve. He seemed completed now. He aroused no fruitful fecundity in her. He seemed added up, finished. She knew him all round, not on any side did he lead into the unknown. Poignant, almost passionate appreciation she felt for him, but none of the dreadful wonder, none of the rich fear, the connexion with the unknown, or the reverence of love. He was, however, unaware this morning. His body was quiet and fulfilled, his veins complete with satisfaction, he was happy, finished.(473～4)

ここでは彼の肉体の美しさへの讃嘆と彼女の魂の不満とが互に全く異った次元の感情として彼女の中に存在していて，その二つを融合させる事は全く不可能なものとしてあるのである。その遊離した有様は極めて明晰であり，既に問題の本質をすっかり見抜いてしまっているアーシュラの心には本質的な煩悶や迷妄はないかの如くすら思われる。彼女とのアントンの間に横わる根源的な相異はすべて明瞭にその姿を現しており，後は彼女の選択を待つのみだからである。社会的地位をもつ夫人になるか，懐姙の錯覚から生じた母性愛の眼醒めに身を委ねるか，それは本質的な問題ではなく，正しい選択を誤まらせる誘惑とはなり得ても，姿を見せてしまった本質を隠蔽する力はない。眼に見えている本質を手放さないだけの勇気があるか否かの問題にすぎないのである。作者の意図如何に拘らず，ここに至ってアントンを捨てるアーシュラは，肉体と魂とを同次元でとらえる事はできなかったのである。ロレンスによって現に描かれている儘のアントンを通して，アーシュラは自分の中で分離してしまった二つのうち肉体を捨てて魂を取ったのである。

アントンには生命を慈しむ優しさがなかったわけであるが，一方アーシュラにはそれに対するつつましさがなく，そこに高慢な観念の欲求を持ち込んだわけであって，二人は功罪相半すると見る事もできるのである。それは単にアントンにとって過酷な要求であったというだけでなく，肉体と魂のあり方に対す

るアーシュラの錯覚であったとも言うべきではなかろうか。

以上は極論にすぎるかも知れない。だが一応ここで，アントンをアーシュラの高い魂の慾求に応える事のできない無能な存在と断定する考え方に対比させる意味で，上の考え方を明確にさせておき，ロレンスの創作意図が何処にあり，それがどの様に展開されているかを概観する手だてとしておきたい。物語の冒頭近くに次の様な天と地の生命の交感を描いた文章がある。

> They knew the intercourse between heaven and earth,sunshine drawn into the breast and bowels, the rain sucked up in the daytime, nakedness that comes under the wind in autumn, showing the birds' nests no longer worth hiding. Their life and interrelations were such; feeling the pulse and body of the soil, that opened to their furrow for the grain, and became smooth and supple after their ploughing, and clung to their feet with a weight that pulled like desire, lying hard and unresponsive when the crops were to be shorn away. The young corn waved and was silken, and the lustre slid along the limbs of the men who saw it. They took the udder of the cows, the cows yielded milk and pulse against the hands of the men, the pulse of the blood of the teats of the cows beat into the pulse of the hands of the men. They mounted their horses, and held life between the grip of their kness, they harnessed their horses at the wagon, and, with hand on the bridle-rings, drew the heaving of the horses after their will. (8)

Leavis はこの前後を含めた個所を引用して，「これらの言葉はロレンスの考える主題に欠く事のできないものを，現実の存在として定着させる，つまり，この作品の実質をなすものの一部として造りあげる，ものなのだ[(9)]」と言っている。鋤を入れた新しい土壌に人間の足が喰い込み，若いとうもろこしの光沢が

人間の四肢の肌に触れ，牛の乳房は人間の手の中で乳を奔出し，人間の逞ましい股間の力で馬の生命は昂揚する，そうした生命と生命の親密な接触を通して大地の鼓動は息づくのであり，そうして初めて天からの陽光や雨滴が生命の糧となり，天と地の交感がなされるのである。ここにいう「天」というものから虹のイメージも出て来たのであろうが，人間の生命そのものは大地に密着して存在するべきであり，むしろそこに執着する事こそ本来あるべき姿だと思われるのであり，アーシュラの誤ちはその確とした大地を離れて漠として捉え難い宗教的情熱の強さに屈服した事にあると見る事はできないであろうか。人間にとって天の生命につながる道は，地に密着した個々の人間の生命の核という実体に触れるその濃密な接点の中にのみあるのだという事を以上の引用文は期せずして語っている筈であり，それこそが肉体に人間存在の基礎をおく事だった筈なのである。

ロレンスはその基本的態度を貫く事ができなかったようである。アーシュラの魂の宗教的情熱はアントンとの完全な肉体の結びつきの後にいつも慾求不満の形で現われ，アントンの肉体の美しさとそれのもたらすものを矮小なものにしてしまう。それは，大地の肉体の世界を捨てて魂が高く天に飛翔し始めた事を意味していると言えよう。

勿論アントンを利己的な肉慾と不毛な近代精神の象徴と見れば，アーシュラの不満はすべて肯定されるであろう。だが，一方では二人の間の破綻を暗示しておきながら，他方では初めの出会いから二人の間に真正な肉体の結びつきを与えていたところに，作者ロレンスの創作意図の乱れを見る事ができる。人間の肉体そのものの触れ合いの中に宗教の根源を見出そうとしながら，結局はそれをなし得ず，伝統に従って観念的なものに転移し，肉体を踏み台として利用する事によってその間隙を埋めざるを得なかったのだと考える事ができよう。勿論作者ロレンスの良心を疑っているのでは更々ない。アントンを単なる肉慾と不毛の象徴に落としておけば，物語はすっきりしたものになっていたであろうが，それをせずに彼の肉体の美の中に執拗に宗教的情熱の根源を見出そうとし，そして終にそれを果し得ずに観念的なものに転移する事によってその乱れ

を収拾しようとしたところに，人間ロレンスの背負った伝統の重さがあり，作家ロレンスの迷誤と敗北，誠実と苦悩が感じられるのである。

ロレンスは自分を宗教的人間だと言っているが[10]，その根源を肉体的なものの中におくか，霊的なものの中におくかに関して，自己の本質に対する意識されない錯覚がある様に思われ，この作品においてロレンスは宗教を肉体を基盤として実現する事はできていないのであり，アーシュラとアントンの失敗は，彼の肉慾の幻想の敗北によるだけでなく，作者の意図如何に拘らず，彼女の観念の幻想の敗北の故でもあったのである。Moynahanは，「『虹』は結局非宗教的作品であり，ロレンスの生命に対する測り知れない意慾というものはユダヤ教からキリスト教への伝統のもつ神秘的な神性な意慾とは異ったものなのだ[11]」と言い，Youngは「この小説におけるロレンスの唯一の希望は，或る種の宗教の中にある。しかし彼は，そういう宗教が存在するということを，読者に説得するというよりむしろ，そこへ到達する道を，よう護しているのである[12]」と言う。だが，ユダヤ教やキリスト教の伝統に沿っていないからといって必ずしも非宗教的だとは言えないであろうし，質の異る宗教があるのだと言いたいからこそロレンスはアーシュラにアントンを捨てさせたのだと見るべきではなかろうか。勿論ロレンスの求める宗教はユダヤ教・キリスト教の伝統に沿ったものではなく，その宗教への道をロレンスがよう護している事も確かである。だが，伝統を離れた筈の宗教に重たく伝統の荷がかかっていたために，それへの道のよう護が宙に浮いた感を与える事もやはり確かなのである。

アントンを単なる悪玉に仕立てるだけでは，二人の間の確執を作者が追い続けた深い意味を汲み取る事は出来ない。アントンの肉体と精神は互に異った人間の肉体と精神の如く扱われ，しかも彼は近代に毒され切った恐ろしい肉体や精神の持主であるわけでもない。そうした中途半端な人物にしてしまったところに，ロレンスがアーシュラの魂の憧憬と肉体の愛とを一つの次元でとらえられなかった所以があるのだと言えよう。彼女の虹のイメージは勿論肉体的なものを全く捨て去ったものではないが，少なくともそれは大地に執着すべき人間同士の接触を高みから見降した位置に発したものに思われる。そしてそのイメ

ージが憧憬の範囲にとどまっているところにこの作品の未完成さがあり，後のロレンスの作品の世界で新しく大きな地位を占めるに至るアントンのもつ近代の生命否定の精神を徹底して描き，アーシュラの憧憬を再び大地に引き降ろして二つを対比させてこそ，肉体的存在にすべての基礎を置く立場が貫かれ得るのではなかろうか。

アーシュラの祖父母や両親の場合には，それぞれの形においてではあるが，性は日常生活の中の問題であった。アーシュラが性の日常化をなし得なかった奥には，アントンの近代的な国家尊重や生命否定の精神と闘わねばならなかった事，前の世代の中に孤立した形で生きていた両性関係の本質的な問題を自己の中で総合完成する使命を背負っていた事情を見る事ができる。三代に亘る男女の生活を描かんとしたロレンスは，自分と同時代の人間に至って問題の本質を日常の中に定着させる事，言い換えれば，近代の不毛と生命の礼讃とを統一した作品の世界に吸収する事ができなかったという事になろう。Keith Sagar が「終りに近づくにつれて，拡がりよりも深さを求めようとし，一人の人間の魂を象徴化する事によってより広い社会的主題に近づこうとする力が働いているのだ[13]」と言っているのは同様の事情を語ったものであろうが，そこに創作態度の混乱と作品の世界の分裂があったのである。

注

(1) Beal, Anthony: *Lawrence*, Oliver and Boyd, Edinburgh and London, 1961, p. 28.

(2) Moynahan, Julian: *The Deed of Life, the novels and tales of D. H. Lawrence*, Princeton University Press, 1963, p. 52.

(3) Spilka, Mark: *The Love Ethic of D.H. Lawrence*, Indiana University Press, 1966, p. 9.

(4) Moynahan: *The Deed of Life*, p. 64.

(5) 旧約聖書，「創生記」第六章第二節。

(6) Young, Kenneth: 瀬尾裕訳。『ロレンス』，研究社，東京，1969, 29頁。

(7) Leavis, F.R.: *D.H. Lawrence: Novelist*, A Peregrine Book, Penguin Books, 1964, p. 115.

(8) Moynahan: *The Deed of Life*, p. 71.

(9) Leavis: *D.H. Lawrence: Novelist*, p. 102.

(10) Lawrence's Letter to Edward Garnett, 22 April 1914.

(11) Moynahan: *The Deed of Life*, p. 70.

(12) Young: 『ロレンス』, 32頁。

(13) Sagar, Keith: *The Art of D.H. Lawrence*, Cambridge University Press, 1966, p. 72.